

<研究ノート>

リルケの<rose-seule, rien-que-rose>
——墓碑銘三行詩の解釈あるいは解読の試みに向けて

田 中 俊 夫

1

リルケ（1875—1926）の最晩年のフランス語詩集『果樹園』（1925, II, 515ff.）の第11詩は、「豊穡^{つの}の角」を副題として古代神話から無尽蔵の花と果実を惜しみなく降り注ぐというこの祭器を今日に呼び込んで、異郷スイス（南東部ヴァレ地方）に在って宿願の『ドゥイの悲歌』（1922）の完成を果たし、感謝と充実の日々を送る詩人の消息を窺わせて明快であった。少し具体的には、リルケの現下の日常風景である果樹の畑と柵園の広がる丘陵の詩的変容ともみなせる壮大な「豊穡の角」が花と果実を、実に「私たち」の感動喜悦を諒ともせず果てしなく降り注ぐのである。とはいえ、この著名ともいえる詩が『果樹園』を代表する一詩とというるには至らないのである。ひとつにはこの詩が同日につくられたその副題と同名のドイツ語詩<Das Füllhorn>（II, 521）との二重詩⁽¹⁾（Doppelgedicht）であり、独自性にやや翳りがあることにもよるが、何よりも果樹園をはじめとする「体験された周囲⁽²⁾」を、あえて言えば彼にしては即物的・写生的に歌い描いたと感じさせる少なからぬ詩が一体的にこの詩集のイメージを、書名とも直に響き合って作り上げているからであろう。そもそもこの詩集は晩年あるいは最晩年の平穏で「比較的幸せな⁽³⁾」敢えていえば「楽しい生」（第32詩）——これ自体リルケが苦行の生き方を己が基本的態度として高唱してきたことからすれば目覚ましいことであるが——という掴みやすいモチーフにとどまらず様々なモチーフの詩が

含まれ、それはこの詩集に特徴的な編集プロセスに係る⁽⁴⁾ことであるとしても、やや雑多な印象さえ与えているのである。そうした中においてリルケ自らの死期の予感を色濃くにじませた詩も時々に見れ、「豊穡の角」の極まりない歓喜にも慎みを及ぼしつつ、詩集全体の雰囲気静謐なものに導くのである。そのような最初の詩が次の第8詩である。

私たちの最後の前の (avant-dernier) 言葉は／惨めさの言葉であろう。
／しかし母なる意識 (la conscience-mère) の前では、最後の言葉は美しいであろう／というのは、いかなる苦渋の味も／それを引きとめることはできないであろう／一つの熱望のすべての努力を／ひとはそこに要約しなければならないのだから。

リルケはこの『果樹園』を出版してほぼ1年半後の1926年の末に死を迎え、遺言に従って晩年の生を営んだその土地近くの教会墓地に葬られるが、その墓碑銘は彼の詩人としての「最後の言葉」ととらえることもできるであろう。

Rose, oh reiner Widerspruch, Lust,
Niemandes Schlaf zu sein unter soviel
Lidern. (KA Bd. 2, S. 394)

バラよ、おお純粋な矛盾、歓び／このように多くのまぶたの下にあって、
／誰のものでもない、眠りであるという（誰でもない者の、眠りであるという）＊。（＊カッコ内はこのような訳出も可能かと付記したものである）

このドイツ語三行詩をリルケは『果樹園』成立後まもなく作成した遺言状の中で、墓碑銘と定めていた。但しこの詩には9日以内前に成立していた初稿があり、そこでは2箇所表記の微妙な違いがみられ<Widerspruch:>であり、<niemadndes>であった。『果樹園』に先立つフランス語の連作詩

集の『薔薇』（1925）では、この花を『果樹園』とは異なり単一テーマとして歌い通したことからして、またそもそもこの花はリルケが最も多く歌ってきた花であろうことからして、バラを歌う墓碑銘はこの詩人に似つかわしいであろう。また彼の死の病となった白血病の発症の因は、リルケがバラの花を摘むことであったこともこの墓碑銘のイメージに映じるであろう。こうした点での平明さの一方で、この詩即ち墓碑銘の真義については、実に様々な解釈が、例えばこれが三行詩であり、リルケが俳句に関心を抱いていたこととの接点から、あるいは末尾の<Lidern>が音韻上<Liedern>（「歌」）に等しいことに沿ってなど、行われてきたが定説なるものは得られていない⁽⁵⁾。さらにはこの墓碑銘の詩を「詩よりも謎と把握⁽⁶⁾」する傾向すらあったこと、さらにはそれがリルケ自らの「意図」でもあったことの指摘もなされている⁽⁶⁾。小論は『果樹園』の詩調に詩人自らの死期の予感が確実に含まれていることへの把握に沿って、蝸牛の歩みながらこの墓碑銘の読み取りの困難さに少し近づいてみたい。

2

感動に満ちた呼びかけ、あるいは呼び出しの一語で詩を開始するのは、象徴法と共にリルケの顕著な詩法であるが、この碑銘の詩でもバラが勢いをもって呼びかけられ、これに自ずから誘発される如く「おお、純粹な矛盾」と「歎び」が発語され第1行を形造っている。次にこの「矛盾」にして「歎び」なるものの内容を示す zu 不定句が一語を残して第2行を作り、その残りの一語がそれだけで、視覚的にも印象的な最終行を成していることになる。

少し気づきにくいのが、第2行の<Niemandes>は初稿ではやはり行頭にありながら小文字表記であることからして、決定稿で大文字であるのは、行頭の位置によるものではなく、詩人はこれを名詞として、さらには固有名詞的に、用いているのであり、この点は解釈の上でも留意を逸すべきでないよ

うに思われる。

従来のリルケの夥しいほどのバラの詩と比較して直ちに目立つのは、墓碑銘であることによる短詩形であることを別とすれば、「純粹な矛盾」という鮮烈な言表であり、そしてまたこれと「歎び」との特異な親和の確言であろう。が、これに続く zu 不定句に盛られた「歎び」つまりは「矛盾」の内訳は浮動感を伴うのである。そうしたことの把握のための踏み出しとしては zu 不定句中の対立すべき 2 項の確認あるいは固定と、その「純粹な」対立の軸を照らし出すことであろう。ただ、ついでに言えばこの碑銘詩は 12 語の三行詩でありながら、少なからぬ、しかも権威ある研究家の詩解釈においても、原詩の正確な引用に基づかず、例えば、二行詩として引用されたり、ひと綴りである「かくも多くの (soviel)」が 2 語 (so viel) として、また <Niemandes> が小文字 (niemandes) で等、こうしたことも多様な解釈を許すことにつながりもするであろう⁽⁷⁾。

当然のことながら、詩の、とりわけ難解な詩の、解釈において、同じ作者の同一テーマの作品は、少なからぬヒントを与えるはずであり、別けても対似（相似・平行）箇所（Pararellstelle）を含む詩は極めて有効な資料となりうるものである。『果樹園』に先立つ『薔薇』はまさしくそうしたものとして直ちに挙げられるが、実のところ、これにもまして碑銘詩の初稿と同じ手帳の同じページにおそらく同じ日に書き込まれたフランス語の「墓地 (cimetière)」という随想こそ、ここに想起されるべきであろう。以下はその訥訳である。

これらの墓の中に生の後味はあるのか？ そして蜜蜂たち、彼らは花々の口の中に沈黙しているところのほとんど言葉であるもの (un presque-mot) を見つけるのだろうか？ おお、花々よ、私たちの幸福の本能に囚われし者たちよ、お前たちは私たちの死と共に私たちの静脈の中に再び戻ってくるのか？ どのように私たちの支配から逃れるのか、花々

よ？ どのように私[・]た[・]ち[・]の花ではないのか？ 薔薇が私たちから逃れるのは、すべてのその花びらによってであるのか？ 彼女は薔薇のみである者（rose-seule）、薔薇以外の何者でもない者（rien-que-rose）、でありたいのか？ たくさんの臉の下にあって、誰のものでもない、眠りで？（誰でもない者の、眠りで？）（Sommeil de personne sous tant de paupières?）

（Ⅱ,611. カッコ内の別訳付記は引用者）

「私たち」と、一本の「薔薇」に収斂する「花々」との関わり合いのこうした言説は奇異にも響くであろう。が、「私たち」の多用が詩人の思いの切実さを伝えるであろう。この散文詩ともいえる短い随想は、対似資料群の中でその末尾が碑銘三行詩の結語と唯一重なり、このことだけからも『薔薇』を含めた他の追隨を許さぬ感がある。「私たち」からの関わりに対するバラ自らのあり方についてのバラの願望の所在への確認的な問いかけが絞られていき、墓碑銘にあってこの随想にはない「歛び」そして「純粹な矛盾」のフランス語の発語まであと一步という印象を与えるであろうし、いわば墓碑銘の前^{アレ}初稿とも見做しうるものがあるであろう。とはいえ、あるいは、そうであるが故に、『註解付リルケ全集』の追補巻が指摘していることでもあるが、この随想も碑銘詩に全的な理解を与えるものとはならない。

この随想は文体的には初めから終わりまで疑問文が書き連ねられ、文字通り間隙のない疑問続唱である。結びは厳密には疑問フレーズであるが、フレーズであることにより随想が文のみの連続で終わる単調さを遮断し、それまでの言説を統括する堅固な結語になっている。まずリルケは「墓地」の夫々の墓が「生」の余韻を含んでいるのかを問うている。『悲歌』の第十では「若い死者たち」の「最初の無時間の平静さの状態」を「生の習慣からの離脱のそれ」と措いていたことと呼応するであろう。次に墓地の花から花へと飛び移っては花の「口」へ入り込む蜜蜂たちに目を映し、この図像を介して、バラに不意に特化することになる花々の「言葉」めくもの、つまりはバラの

切実な心情を聞き取り、確かめようとするのであり、そのことを通してバラの本然つまりは「歛び」へのリルケの確信あるいは危惧を披瀝し展開してゆくのである。リルケが自責的に聞きたろうとしたものは、専ら奇異にも響き神経症の口吻を疑わせもする内容であるにせよ、分かりやすく述べられているように、バラが人間との関わりを脱しバラ自らでありたいという思いであり、バラが人間からの賞讃をも忌避し自らであろうとする純粋に独在自立の意志である。この特異のモチーフは、そもそも『果樹園』の前半で「どれだけ人々は花々に奇妙な打ち明け話をしたとか。…星々はみな当惑している。私たちの悩みの中に人々が彼らを混ぜ込んでいることに」（第4詩）というふうに、またすでに『オルフォイスへのソネット』（1922）で「あらゆるものの上に私たち自身を、文鎮のように、重みに酔い痴れながら、置いてのしかかる」ことを以て、「私たちは事物たちにとってむしろ教師たち」（第二部・14歌）であったように、人間からの身勝手な関与への困惑とその拒否の思いが独特に指示されてきたのであり、これらの詩が互に対似資料として結束して響きを発するのである。

バラの黙した願いとして、リルケが強い危惧を込めてバラにそして自らに問うた、バラが厳密に純粋に自分でありたいという在り方とは、もとより、『若き詩人への手紙』⁽⁸⁾が現代人の「孤独」のバイブルでありうるほどに、人間対者との関連に基本的には否定的であったリルケ自らの生の態度であることからすれば、バラはリルケの詩に登場するほぼ悉くの形象が比喩形象であることにも沿って、リルケが自らの言葉で養い育てた隠喩の、感情移入のバラであることは自明であり、さらにはその自明さをなんら顧慮せずの如くに歌いもするリルケの歌声は、その自明さとは別に野に咲く現実のバラの形象イメージそのものをも鮮明に浮かび上がらせるのである。形象の比喩性と具象性が共振するのである。ひとつの形象を「空無」から己れの詩域へ、実は渾身の力を込めて辛うじて呼び出す者を、リルケは碑銘詩を定めたと同じところに歌い描いているが、その勧請の演者を詩人、とではなく、「魔術師」

(II,150)と呼んだのである。

またリルケが自らの詩業を通して唱え続けてきた様々なイデーも、自分が自分であること、そうありたいことへの思いに由来し帰するといえるであろう。リルケの、恋人を乗り越えてもおなお恋人の背後の「空間」(第4悲歌)を愛しつつけるという独特に非所有である愛の教説も、例えば『マルテの手記』(1910)の終章(VI, 938ff.)で蕩児が「相手」の「自由」を守らんがために「相手」を「照破」し且つ「自分の求愛が受け入れられるのを極度に恐れた」にしても、その力説の奥には自らの自由の全的な確保のデモニッシュな意力が、墓碑銘に言う「歎び」にも似て、潜むことを思わないわけにいかないであろう。

仏語随想「墓地」は、碑銘詩の傑出した対似箇所として、前述したように、結びの「このように多くのまぶたの下」での「誰のものでもない、眠り？」あるいは「誰でもない者の、眠り？」へ向かう疑問続唱であり、全体としてバラが人間たちの関与を脱し、バラ以外の何者でもないことを願う思いへの、リルケの共感の表出であることは明瞭である。しかしまた碑銘詩に言う「純粋な矛盾」の究極的な内容については、明瞭な指示は与えていないのであり、その意味でもやはり対似箇所であるのかもしれない。とはいえ、墓碑の詩の解釈の難儀さあるいは多様さは結局のところその結語に集約されることが、この詩的随想の結語のあり方から、より明らかとなるのである。とすれば、「謎」めいて捉えきれない、つまりは「私たちの」解釈の「支配から逃れる」ことを願う如き双方の結語について、結語にとっての「重み」・重圧とならないような把握に向けての試みが促されるであろう。そうした試みにあっては、<Niemandes>即ち<de personne>の語釈、つまりはこの否定詞によって否定排除される対象や、この語がここでリルケ独自の用い方をされているのか等について、考えが巡らされることになるであろう。紙幅の終わりに辿り着いた小論としては、墓碑銘の<Niemandes>が代名詞ではなく、名詞として用いられているであろうこと、及びリルケ自らは匿名性への強い志

向があること等をも踏まえて、稿を改め論を進めていく勇を自らに期すばかりである。

註

リルケ (Rainer Maria Rilke) のテキスト及び訳註文献は主に次を用いた。Sämtliche Werke. 7 Bde. Insel-Verlag. (以下、巻数とページ数のみを示す。例… I, 253) / Werke Kommentierte Ausgabe. 4 Bde. u. 1 Supplumentband, Insel-Verlag. (KA と略記、但し追補巻は KAS と略記) / Briefe, Insel-Verlag ²1950 (Br. と略記) / A. Poulin Jr., : Complete French Poems of Rainer Maria Rilke, graywolf press 2002./Yvonne Goetzfried : R. M. Rilke Vergers Obstgarten, ars vivendi verlag 2007./弥生書房「リルケ全集・二」(昭和五七年) /堀口大学訳：「リルケ 果樹園」(青磁社) (昭和十七年)。作品名は随時略称を用いた。引用個所の傍点部は、原文では斜体である。

- (1) 拙稿「リルケ『果樹園』の「豊穡の角」」(本論集第50号所収集) 参照。
- (2) E. Korrodi 宛書簡 (20. März 1926; Br. S.930ff.) の中で、リルケ自ら、青年期のプラーク時代以来絶えてなかったこととして、「体験された周囲 (die erlebte Umgebung) を直接詩の中で讃め、それを『歌う』」ことを行ったと述べている。
- (3) E. C. Mason : Rainer Maria Rilke—Sein Leben und sein Werk, Göttingen 1964. S. 131.
- (4) リルケは『果樹園』に入れる候補の詩群からの採択にも配列にも関わらなかった。(Vgl. KAS. S. 454) また標題自体「友人たちによって選ばれた」。(E. Korrodi, wie Oben)
- (5) J.Wolff の《Rilkes Grabschrift》(1983 L. Stiehm Verlag)、では20名以上の研究家の所説が紹介されている (S.172ff.)。
- (6) J.Wolff : Wie Oben, S.22 u. S. 182.
- (7) 1988年出版の《R. M. Rilke : Poèmes français》(Insel Verlag) においては、その解説で第2行の<unter soviel>を次行に送り、<unter soviel Lidern.> (S.248) と、まとめて引用する誤り (あるいは僭越) のみにとどまらない。
- (8) R. M. Rilke : Briefe an einen jungen Dichter, (Insel-Bücherei Nr. 406).